

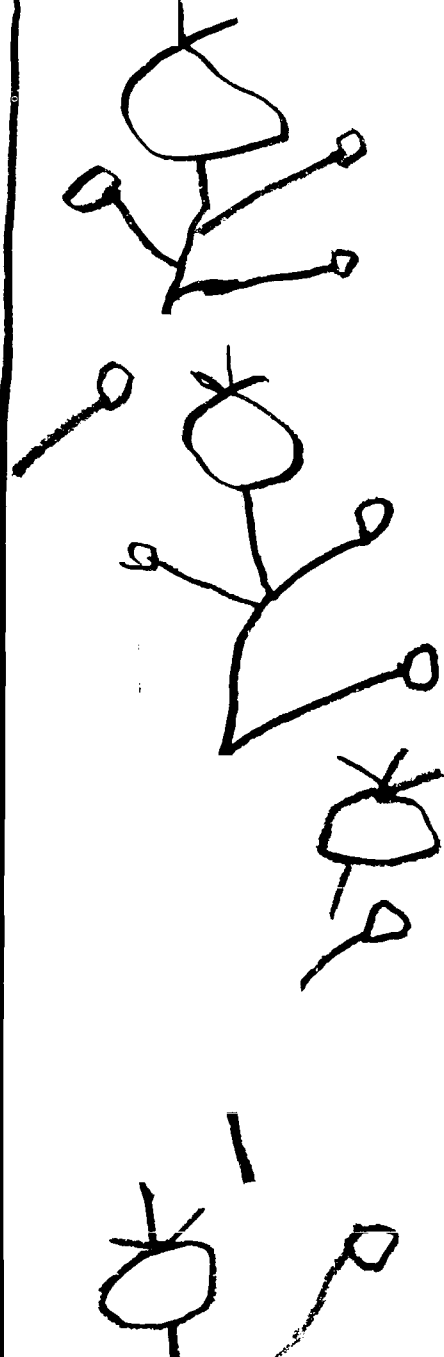
小島直記
伝記文学全集

島直記

伝記文学全集

第五卷

中央公論社



小島直記伝記文学全集

第五卷

定価 三四〇〇円

昭和六十二年 二月十日印刷

昭和六十二年 二月二十日発行

著 者 小島直記

発行者 嶋中鵬二

印刷者 小林 清

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替 東京二一三四

©一九八七 検印廃止

ISBN4-12-402685-8

小島直記伝記文学全集

第五卷

目次

小説三井物産

条ドン

役得

海風

士魂商才

直参くずれ

女衞街

巷塵

播磨屋

地球儀

大蔵大輔

誓紙

113 103 93 83 73 63 53 42 31 21 11

浪花立志編	124
背のび	134
脂粉	144
柳橋	155
帰巢	165
有縁無縁	175
一党	185
騎馬行	195
小刻み	205
友垣	215
新局面	225
無資本会社	235
不満	245
疑惑	255
渴き	265

たずねびと 迷路 頼朝丸 左遷 桜痴 北の旅 まえうしろ 軍艦 羽織 さし 初陣 拔擢 めし 本店 賭ける

420 410 399 389 379 369 359 348 338 327 317 307 297 286 275

新天地
三井炭礦
標的
秘密
麦酒
目黒村
人選び
母おもい
けむり
変装
戦鼓
密使

小島直記伝記文学全集

第五卷

小説三井物産

小説三井物産

条 ド ン

一

おとなたちは、話ばかりしている。

(よく話のタネがつきぬものだ)

と条太郎はあきれていた。

この店にきて、かれこれ二時間にはなる。そのあいだ、叔父も、支店長も、自分などにはみむきもしないで、世間話に熱中しているのだ。

(叔父さんも叔父さんだ——)

腕をくんで、相槌をうつ吉田健三の顔を条太郎は見つめた。

死んだ母の弟にあたる。自由党员で、今は横浜の実業家として羽ぶりをきかせている。その口ぞえで三井物産横浜支店にやとわれることとなり、あいさつのため、支店長のところにつれてきてくれたのだ。

ところが、かんじんの自分のことは、いっこうに話題にのぼらない。

(支店長さんも支店長さんだ——)

条太郎は、視線をうつした。

馬越恭平、という名前であることは、すでに叔父にきいている。叔父よりは年上にちがいないが、まだ四十歳には間がありそうだと思われた。眉がサムライのようで、唇がしまるとこわい顔になる。とくに耳が大きい。

元氣な話しぶりだ。条太郎もよく知っている町の商人たちのような、ヘイコラする卑屈な調子がない。そのかわり、いささか高飛車なところもある。

(ちよっとこれだ——)

叔父がこぶしを鼻の上にもってきて、天狗になっている、自信満々だ、と批評したことがウソでなかったこともわかってきた。

それにしても、話ずきなひとはある。ちょうど二月前に、北海道開拓使官有物払い下げ事件、というのがあった。馬越支店長はそれを話題にしていた。

「……ともかく、千数百万円をつぎこんだ政府事業を、わずか三十八万円、それも無利息三十ヵ年賦でくれてやろう、というのはひどい話だ」

そういって、馬越は自分で大きくうなずき、叔父が口を開く前に、ことばをついでいる。

「払い下げをうける連中は、年間たった一万二千円ばかりで、北海道全部の産業施設を手に入れることになります。そればかりじゃない。今後十年間、魚類の運送販売権をひとりじめにし、その上さらに報償として、売上げの百分の六がもらえる。ばかりではない。開拓使が漁民に貸しつける米や塩も、一手販売権をにぎる、というのですからな。年賦金一年分の数十倍の金が、ふところ手をしていてもうかる、ということは、ロハで北海道をくれてやったも同然でしょう。そういう政治をやってはいけません」

「お説のとおりです、馬越さん」

吉田健三は腕ぐみをとぎ、ぐっと胸をそらせた。

「しかしだ、この問題の基本的性格については、馬越さん、あなたがた三井の幹部諸公にも、大いに反省すべき点があるように思うのですが……」

「というと？」

馬越は、するどい、というよりも陰しい目で吉田を見返した。

今までの親密な空気がいっぺんに冷えてしまつて、おとな同士が、敵意をむきだしにして向ひあつた、という感じだ。条太郎は、なんとはなしに身の引きしまるような緊張感をおぼえた。

叔父は、いう。声は、激していない。

「幸いにも、払い下げ問題は中絶した。これは主として慶応義塾出身者を中心とする反対が効を奏したことになります。しかし馬越さん、東京市内各所でひらかれた反対演説会には多くの市民がおしよせ、熱狂したという事実は注目すべきではなからうか。まだ不十分ではあつたとしても、結局のところ、世論の勝利という形になつたところに世のうつりかわりがある。このことは、維新以来、藩閥勢力と手をむすんで、利権を独占してきたやり方について、日本人一般の批判が芽ばえ、実をむすんできたということではなからうか……」

「しかし——」

「無論、この批判力をどう評価するかは見解のわかれるところかもしれない。だが私見としては、これは単に一北海道問題のみにとどまらない。開拓使長官黒田清隆と五代友厚、もと薩摩藩士同士の情実による国有財産処分だけが問題ではない。やがて批判の対象はひろがり、全般的に、いや、根本的に、というべきかもしれないが、今日までの政治と経済のむすびつき方が論じられることでしょう。率直に申すならば、長州閥と三井、という関係も当然ヤリ玉にあがるのではないで

すか」

「うちのやり方と、開拓使問題を同一視されてはこまりますな」

馬越は、はき捨てるようにいった。眉根をよせ、唇がゆがんでいるのは、あきらかに不機嫌のしるしであろう。

（いいのかな？）

条太郎は、おそれた。叔父のいつていることの、よしあしを見わかる知識はもっていない。ただ、就職の用件で訪ねてきて、相手を怒らせてはまずいのではなからうか。

ちょうどそのとき、馬越の光った目は条太郎をとらえた。

「これは？」

馬越は吉田に視線をうつした。

「私の甥の、山本条太郎です。先日、やとい入れのことをおねがいましたのは、このことですが——」

「なるほど」

馬越は皮肉な笑みをうかべる。

「三井のやり方は批判するが、甥御さんの身のふり方は三井にたのむ、というわけですか——」

吉田健三は苦笑していた。

「気分をこわされたようだが、それはこまります。私のいい方もまずかったかもしれない。要するに、北海道問題を契機として、一つの輿論がおこり、それが今後の政治経済を動かす力になるだろうという予測を申しあげたまでのことで、私自身が三井さんをかれこれいつているわけではありません」